第28号　20円
昭和47年9月25日

内　容

新段階を迎えた大学間交流… 1
第6回大学教員懇談会…… 2
共同セミナー委員会…… 3
千人会…… 3
第47回大学共同セミナー…… 4
歴史にみる日本民族性…… 4
第48回大学共同セミナー…… 5
第49回大学共同セミナー…… 6
第6回会員校事務連絡会…… 7
業務通信…… 8
利用状況…… 8

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電　話　0426-76-8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電　話　東京(241)3961
振替口座　東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

新段階を迎えた大学間交流
――大学セミナー・ハウス七年の成果を顧みて――

専務理事　飯田宗一郎

意見交流の格好の広場

多くの異なった大学の教授や学生がこのセミナー・ハウスを利用したことによって、いつしかセミナー・ハウスは単なるゼミナール施設であるばかりでなく意見交換の格好の広場となった。

大学紛争が起きて教授たちが初めて気がついたことは、学部相互の間は無論のこと、大学相互の間にも、文部省と大学との間にも、自由に意見の交換ができる対話の場所がこれまで欠けていたということであった。文部省アレルギーはこうした閉鎖的な大学社会に発生した症状というべきであろう。

何はともあれ、偏見とか不信とかを取り除くことが急務と考えられた。こうしたコミュニケーション・ギャップを自覚した教授有志を中心に大学教員懇談会が「日本における大学改革の反省と展望」を主題にした第一回セミナーを当ハウスで開いたのは四五年九月だった。

そこには国公私立大学二五校から六六人の教授たちが参加し生々しい情報を相互に交換し、かつ現状分析が行なわれた。このような機会はいまだかつてなかったことなので、参加者には貴重な体験となったようである。次の要望書がそうした事情をよく説明している。

大学セミナー・ハウスはこうした要望に共鳴して、本来のゼミナール活動の外に、もう一つの事業として大学教員懇談会を加えることによって、Communication Service Center の役割をも担うことになったのである。

大学院ではすでに開始

ところで最近は、学問における専門分野の細分化が進み、一方において境界領域の間口も広がりつつある。したがって、どうしても他の大学と連携する必要が生じ、自学と他大学との授業の相互履修による交流の問題を考えないわけにいかなくなった。ことに大学院ではその必要が早くから痛感され、東大工学部と東工大、京大工学部と阪大の工学部・基礎工学部、青山学院、上智大学、津田塾大学など八大学の英文専攻、同志社、立命、関学、関大の四大学文学部、早稲田、慶応、学習院の三大学文学部など、いずれも大学院レベルで授業の相互履修制度がすでに始まっている。

これまで大学間の単位互換のじゃまになっていた文部省の大学設置基準も、この四月から改正され大学がその気になれば、ある程度の単位の交流が可能になった。

単位互換制を推進
設置基準改正で道開ける

「大学の教員が現場で直面しているさまざまな問題についての新しい試みや、旧来の慣習への反省などが、熱心に語られた。そして何よりも、当面する問題について国公私の別、あるいは各専門分野の差異をこえて直接に語り合うことが、いかに重要であるかが痛感された。

今後もこのような企画をつづけさらに広範な大学教員に呼びかけ今日、大学に課せられている重大な責務について、具体的、基本的な討論を行ない、実践のよすがとする機会が与えられるよう切に要望する」

七月一、二の両日、大学教員懇談会の第六回セミナー「大学交流と大学設置基準の改正について」が開かれたのは、こうした時流に、大学がどう答えるのか、を議論するためだった。このセミナーには国公立大学一〇校から二九人、私立大学二二校から四四人のほか文部省から木田宏大学学術局長も参加した。発題者として国立大学側からは東大工学部教授鵜戸口英善氏、阪大工学部教授伊藤富雄氏、私立大学側からは慶応大学文学部教授沢田允茂氏、早大文学部教授樫山欽四郎氏が実例に即した意見を述べ、貴重な資料を提供された。

試行重ねながら定着へ

まず第一に、討議を通じて感じたことは、この段階に来たからには、やれるところからやってみるということである。相手大学に迷惑をかけるほど多数の学生が移動するかどうか、無用の心配をすることより、まず実行し、試行を重ねつつ互換制度を日本の大学の中に定着させたいものである。レベルが高いとされている大学同士が縁組みすることに対し、そうでない大学の反感、同格大学だけがグループ化することに対する警戒、現在以上に大学の格差を助長しないかといった危機感などは実行する場合に留意すべき点であろう。一方において地理的条件を考慮し

（2頁へつづく）

第六回大学教員懇談会

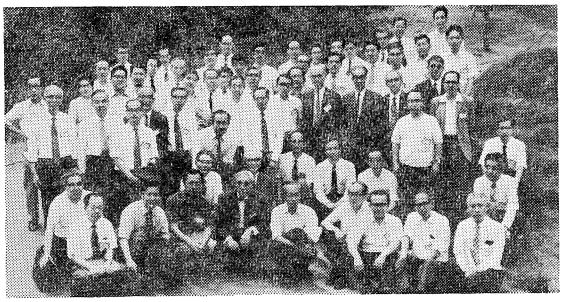
自主性と開放性で議論わく

——木田文部省大学学術局長を迎えて——

主　題　大学設置基準と大学交流について

期　日　昭和47年7月1～2日

去る三月一八日、大学設置基準及び学校教育法施行規則の一部を改正する省令が公布され、この四月一日から施行されることとなって、昨今高まっていた大学交流の気運も一段とその方向へ進展してきた。すでに第一回、第三回の教員懇談会において、「大学改革」「大学間の交流」をとり上げ討論を重ねてきているが、今回はこのような現状にかんがみ、「大学設置基準と大学交流について」をテーマに選び、木田宏文部省大学学術局長の発題講演を皮切りに、左記のプログラムによって熱心な討論が展開された。



第6回大学教員懇談会の参加者

最終日は分団討議に引き続きそれぞれの討論内容が報告され、それらをふまえて、当ハウスが単位互換制度にどのようなかたちで参加できるかという具体的な問題提起が出された。この懇談会の詳細は本紙巻頭論文を参照されたい。

なお、世話人代表には目黒謙次郎東京理科大教授があたられ、伊倉退蔵横浜国大教授、川上秀光東大助教授、寺沢誠司東工大教授、小西甚一東京教育大教授らを中心とする世話人会が意欲的に奉仕された。

プログラム

〈発題講演〉

大学設置基準と大学間交流　文部省大学学術局長　木田　宏氏

〈実例報告〉

一、国立大学

東京大学教授　鵜戸口英善氏

大阪大学教授　伊藤　富雄氏

二、私立大学

慶応義塾大学教授　沢田　允茂氏

早稲田大学教授　樫山欽四郎氏

三、米国の諸大学の実状

桜美林大学教授　清水　畏三氏

〈分団討議及び報告〉

〈参加者〉

東工大(六)、東大(五)、教育大(五)、武蔵大(五)、上智大(四)、農工大(四)、中大(三)、電通大(三)、東経大(三)、理科大(三)、明治大(三)、慶大(二)、専修大(二)、東外大(二)、日大(二)、法大(二)、武蔵工大(二)、立大(二)、東女大(二)、青学大、ICU、成蹊大、津田塾大、東京医科歯科大、都立大、日女大、明学大、横浜国大、早大、大阪大、桜美林大、聖心女子大各一名（三二大学）

開館七周年を祝う行事と記念事業

式典——昭和47年11月18日(土)

ご縁の深い人々を招待して

昭和四〇年七月に開館し、一一月に建築落成式を行なったのであったが、早くも大学セミナー・ハウスは創設期七年の歴史をつくったのである。

激動する現代において、一つの小さな教育機関が、過去の存在とならずに、いつも生新の気風にみちた活動的共同体であるためには実現の可能性を探しながら、新たな計画を立てなければならない。それこそが開館七周年の意味であろう。衆知の参加を期待したい。

七月三日に開催した常務理事（1頁より）

た地域間の交流とか、文科系と理科系の相互乗り入れなどは大いに研究すべ課題であろう。

ところで実際に相互交流はどのように行なわれているのであろうか。大学設置基準は、他大学で習得できる単位数を、学部では三〇単位、大学院修士課程では一〇単位、博士課程では二〇単位と規定している。しかし、早稲田・慶応・学習院の三大学協定では二科目八単位を限度とし、京大・阪大の場合は三科目五単位を、東大・東工大の協定でも三科目五単位以内に制限している。まだ制度上認められた単位をめいっぱい使ってはいないし、多くの学生がこの制度を利用するためには、なお解決しなければならない問題があるといえよう。

このセミナーで参加者の関心をひいたもうひとつの問題は、大学セミナー・ハウスが単位の互換制度に参加するとすれば、どのような効用を発揮することができるだろうかという問題だった。単位互換制度がどのように改正されても、大学の意識構造はなかなか変わらない。国立大学と私立大学の組織の相違から来るめんどうな事務手続き、受講料、講師手当の決定、施設と教授陣容から来る困難さ、中央と地方との連携の不便等を考えるとき、どこの大学の学生であっても希望があれば聴講できるサマー・セミナーのようなものをこのセミナー・ハウスで開講することはできないであろうか。本当の開かれた大学を学外に求めるとすれば、七年の実績を持つこのセミナー・ハウスこそ最適の施設ではないか、といった発言が多かったのである。

新しい宿題もかかえる

最後の全体討議では、せめて学生の参加しやすい夏季休暇に三〇時間、二単位ぐらいのセミナーをいくつか開講すること、また入試シーズンの二、三月は、在学生は十分時間に余裕があるから、その時期を活用するのも一つの方法であろうとの意見が活発に述べられた。当セミナー・ハウスはまたしても新しい宿題をかかえたわけである。

事実、このセミナー・ハウスが主催した六月の第四八回大学共同セミナー「日本人の再発見」には、国立九校、私立三一校から学生一二〇人が参加し、国立大学四人、私立大学三人の指導教授の下で二泊三日のゼミナールを開講した実績もある。この種の共同セミナーは昨年度だけでも一〇回、参加学生延べ一、三六二人、参加大学は国立二七校、公立三校、私立五四校に及んでいるのであり、ここには単位を与えることを目的としない開かれた大学がすでに存在しているわけである。

（昭和47年7月10日付　日本経済新聞より転載）

共同セミナー委員会

●正副委員長会議

加藤理事長も出席され、五月八日、早稲田大学九号館会議室において開催、主として任期満了により退任された委員の後任補充、および委員会の開催予定等を議した。

●第二回委員会

新委員をまじえた委員会は六月九日、工業クラブにおいて共同セミナー担当の山内恭彦、宮島龍興両常務理事、委員一五名出席のもとに開催された。

新旧委員の紹介、今後の開催予定、後半期共同セミナーのテーマおよびそれの推進者の確認、共同セミナーのあり方等についての議事を行なった。

本年度の委員の諸先生は左のとおりである。

委員長
川原　栄峰（早稲田大学教授）

副委員長
根岸　愛子（東京女子大学教授）
木村尚三郎（東京大学助教授）

委員（ABC順）
○穐山　貞登（東京工業大学助教授）
福井　文雅（早稲田大学助教授）
○半谷　高久（東京都立大学教授）
○広重　徹（日本大学助教授）
池井　優（慶応義塾大学助教授）
色川　大吉（東京経済大学教授）
柿内　賢信（東京大学教授）
小堀桂一郎（東京大学助教授）
小西　甚一（東京教育大学教授）
三輪　公忠（上智大学教授）
宮崎　繁樹（明治大学教授）
○村上陽一郎（上智大学助教授）
○室　俊司（立教大学助教授）
佐藤　毅（法政大学教授）
世良　正利（中央大学教授）
○鈴木　幸寿（東京外国語大学教授）
徳末安伊子（日本女子大学教授）
宇野　重昭（成蹊大学教授）
八十島義之助（東京大学教授）
○横田　洋三（国際基督教大学助教授）
○印は新任

●第三回委員会

後半期共同セミナーの構想を立てるためには時間の制限をうけないで、ということでの合宿委員会は予定どおり七月一四・一五の両日にかけ、宮島常務理事、委員一四名の出席のもとで、セミナー・ハウスで開催された。その結果は別記の大学共同セミナー開催予告のとおりであるが、他に、共同セミナーのあり方として、従来の形式にこだわらず弾力的に実施すること、小人数の共同セミナーの企画もよいこと、また新年度実施の諸提案等がなされ、議事は深夜まで続けられた。

大学共同セミナー開催予告

第50回　日本文学の新しい研究方法
——平家物語を中心として——
第51回　アジア社会の比較研究
（開館七周年記念セミナー）
第52回　世界は中国をどうみるか
第53回　鷗外と漱石
第54回　日本の水問題
第55回　平和研究のための日本の国際関係の歴史

10月13～15日
11月17～19日
12月1～3日
1月20～21日
2月23～25日
3月9～11日

↙会は、七周年記念行事予定について協議し、東京事務所を強化して記念事業を推進する方針を決定した。開館五周年を期して開始した募金が未だ目標に達しないので、残額七千万円については新たに七周年募金としてこれを継続することとしたい。

◇予定される計画の概要

一、記念行事

A　式典・パーティー・講演
記念講演　三笠宮崇仁殿下
大河内一男氏

B　共同セミナー
アジア社会の比較研究
川田侃教授外五氏参加
国公私立大学の学生を招いて
期日　昭和47年11月17～19日
記念大講演会（都内・予定）

C

二、記念事業

A　七千万円募金（大蔵省指定寄付）
施設、敷地の整備拡充計画資金

B　記念論集「日本人の再発見」
和歌森太郎氏外七氏執筆
編集委員長　小堀桂一郎氏
弘文堂発行

C　広場・自然歩道・野外セミナー場

D　旧日本民家の移築による和風談話室の建設

E　記念誌・記念グラフの編集

千人会

◆早く千人になれ

千人会の名簿ありがとう存じました。諸先生の御誕生日がわかって面白い名簿です。早く千人をこすように祈ります。

一九七二年盛夏　今井　淳

◆千人会のご入会を感謝します。

現在会員（大学人　四七五人
六〇六人　社会人　一三一人）

第17回報告（申込順）

B　早稲田大学講師　原　増司殿
C　創価大学助教授　蒲生栄治殿
C　東京都心身障害者福祉センター　手塚一朗殿
C　専修大学教授　山田一郎殿
A　千葉大学名誉教授　川喜田愛郎殿
C　武蔵工業大学助教授　安味貞正殿
B　東京大学名誉教授　最上武雄殿

◆会費ありがとうございます。

昭和47年4～7月（敬称略）

池井優、榊原繁雄、大畑篤四郎、昌谷春海、笠耐、島田依史子、高瀬文志郎、大河内正陽、村松林太郎、朝永振一郎、鵜川馨、石原忠男、木田宏、吉谷龍一、村井実、池宮英才、福西基、村田全、栗原俊記、井村君江、中島直忠、谷口汎邦、二宮永蔵、染谷恭次郎、加藤寛、村上正夫、犬塚博、都留春夫、井上宇市、和田昌衛、山崎誠、井上百合子、佐藤弦、関根隆光、塩田庄兵衛、東洋一、石井千尋、大槻盛一、須田豊太郎、一柳富夫、M・K、山内二郎、村田喜代治、我妻栄、玉真秀雄、阪本泉、高橋忠次郎、千野熊男、荒井猷、赤摂也、樫山欽四郎、徳永勇雄、川口弘、石川孝夫、橋本次郎、中村英雄、藤井耕一、芹沢栄、山本幹夫、奥山典生、中村孝俊、大原栄一、芳賀徹、長谷川幸男、大野泰雄、小池勇二郎、鈴木二郎、馬場孝悦、天城勲、滋賀秀三、堤辰次郎、浅井義博、太田喜美夫、野間三郎、荒川有史、慶谷淑夫、柴田恭二、吉田幸弘、西川治、道喜美代、芝川栄三、前田護郎、望月継治、市井三郎、和歌森太郎、笠松章、松井源吾、野田一夫、松尾浩也、大河内暁男、篠原泰三、朱牟田夏雄、川田侃、鳥海俊宏、田中未来、藤野登、岡田正弘、長清子、市川節子、岩橋宣隆、秀村欣二、中山昌、江沢洋、保々房、竹内喜夫、名東孝二、太田秀通、川島順平、川添利幸、山内恭彦、田島恵児、千住鎮雄、中川一朗、高島善哉、西村敏男、児玉久雄、石川馨、浅川淳、三和治、中島文夫、小池滋、平出彦仁、山西貞、寺沢徳雄、太田善麿、中村哲哉、和田義信、中村進、藤原鎮男、玉川直重、小川圭治、尾崎茂、宮川俊彦、古本捷治、菊池百合、金丸重鎮、三橋文雄、原増司、佐藤和男、村山松雄、江渕浩美、岩崎英二郎、神保信一、桐生冨久、樋口美智恵、小泉一郎、太田正孝、奥野忠一、岡本栄一、山田一郎、江尻美穂子、小浪充

第47回 大学共同セミナー

主題　科学文明はどこへ行く
期日　昭和47年5月27～28日

〈全体講義〉
科学文明はどこへ行く
千葉大学名誉教授　川喜田愛郎氏

〈セクション演習〉
A　科学技術の本質的課題
——エコロジー的発想のすすめ——
電気通信大学助教授　合田周平氏

B　人類の限界と可能性
慶応義塾大学助教授　木原弘二氏

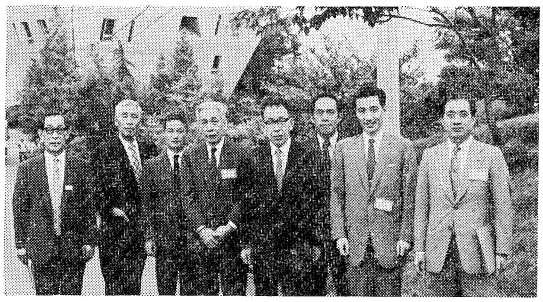
C　人類の意志決定
朝日新聞科学部次長　木村繁氏

D　現代文明の生命観
科学評論家　筑波常治氏

〈ゲスト〉
人間とはなにか
京都大学教授　時実利彦氏

〈運営委員〉
上智大学助教授　村上陽一郎氏

〈参加学生〉
五一名（うち女子一五名）
東女大（六）、東大（四）、中大（四）、早大（四）、理科大（三）、慈恵医大（三）、東教大（二）、東工大（二）、電通大（二）、お茶の水女子大（二）、慶大（二）、日女大（二）、東京工業高専（二）、東外大、一橋大、学芸大、神戸大、都立大、立大、津田塾大、武蔵大、法大、中央学院大、東洋大、東京電気大、ICU各一名、（二五大学、一高専）


川喜田，時実両先生を中にして

〈主題の主旨〉

現代の私たちは、科学文明のもたらしたさまざまな恩恵に浴し、毎日の生活のなかでその成果を享受している反面、環境汚染、自動車事故など、直接的な不都合のほかにも科学文明の枠組みのなかで、生活様式の一様化、画一化など、間接的に私たちにとって圧迫となる種々の桎梏に苦しんでいる。もはや私たちは科学文明の影響の外では一秒たりとも暮せないが、その影響は、望ましいものと望ましくないもの、善と悪とがつねに表裏をなしている。しかも善だけをとって悪を捨てる、というわけには本質的にいかない以上、私たちの未来を科学文明に託することには悲観的にならざるを得ないようにも思われる。

若い世代ほど、科学文明と人間性との関係に鋭い疑問を感じている。しかし、だからといって、科学文明をすべて捨て去って、原始の生活に戻ることが本当の人間の幸福になる、と言い切ることもできまい。

この抜道のないジレンマをどう考えたらよいか。現在、絶対的な解答をもち合わせている人はいないだろう。このセミナーは、皆がそれぞれの立場から力を合わせて、科学文明を人間の未来に肯定的に再編するための道を模索しようとするものである。

◇　◇

新入生歓迎の意味を含めたこのセミナーは、上智大学、村上陽一郎先生が中心となり企画された。ゲストは京都大学より時実利彦先生、セクション指導には大学外より朝日新聞社科学部次長木村繁氏等を迎えるなど多彩の講師陣。運営委員長には慶大、木原先生があたられ、今回は一泊二日の短い期間ではあったが真摯な研究、討論が続けられた。

歴史にみる日本民族性

東京教育大学教授　和歌森太郎

きわめて多元的な系統の種族が日本列島を一種の吹きだまりにして寄り合っているため、種族としての日本人は一つに概括できないが、民族という概念で考えるなら日本語を共通にした生活文化の一様な共同体ということになり、ほとんど沖縄の果て八重山から北海道にかけて民族は一つになっていると言える。その成り立ちは大体二、〇〇〇年近く前の古墳時代と考えられているが、日本列島における住民の歴史は、何万年も前の旧石器時代にその存在が明らかになっている。ただ、人間の骨は浜名湖周辺のわずかなものに限られるので、種族の淵源は十分にわかっていない。文化の状況に関しては狩猟的なものが生業であったということが認められ、縄文時代に入り魚貝を取る生業に携るようになっても、依然として狩猟は続けられた。日本人論の多くが稲作民族の性格ということでなされているが、縄文時代だけでも五、〇〇〇～六、〇〇〇年、弥生時代の農耕の階段からまだ二、〇〇〇年足らずということを比べてみても、実はわれわれの生業からくる性格は、かなり狩猟的なものがあるのではないか、ということを考えなくてはならない。このことは、ヨーロッパ、中国などの大陸における牧畜民の発足と比べて興味ある問題である。

ところで歴史学者は日本人の一つの共通した性癖、性格が歴史を貫いているとみることには抵抗するのが普通である。しかし歴史学者はそれを問題にしなくてもよいということには、私自身、ちょっと抵抗がある。ルース・ベネディクトの「菊と刀」は有名であるが、このような人類学系統の学者の日本人論は、調査の仕方が気紛れで、見たり接したりして評価したものを論理的に結びつけて指摘するきらいがある。たかだか近代一〇〇年の間に育成されたような性格を、長い歴史の中で累積した伝統的な日本人の性格であると認める結果になっていたりして、私の立場としてはもっと慎重に取り上げなければならない問題だと思うからである。たとえば天皇にしても、少なくとも四世紀頃には大君（おおきみ）という概念のもとにあらわれているとしなければならない。時代によりそのあり方は異なり、きわめて権力が集約していた段階もあったが、むしろ長い歴史の中では、それ自身はきわめて無力な存在であった。いずれにし

（5頁へつづく）

第48回 大学共同セミナー

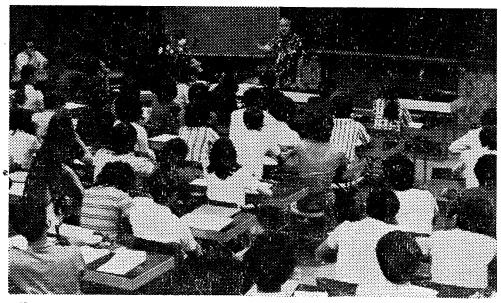
主題　日本人の再発見
期日　昭和47年6月23～25日

〈全体講義〉
歴史にみる日本民族性
東京教育大学教授　和歌森太郎氏

〈セクション演習〉
A　日本社会の特性――政治文化の問題をめぐって――
立教大学教授　神島二郎氏
B　現代青年の意識と行動――その日本的特質――
東京大学助教授　松原治郎氏
C　「甘え」の発見
東京大学教授　土居健郎氏
D　明治の終焉と日本人
――漱石、鷗外の文学に表われた殉死の位相――
東京大学助教授　小堀桂一郎氏
E　国際社会の日本人――国際化の主体たる要件は何か――
日本総合研究所国際部長　金山宣夫氏
F　日本の若者と性の伝統
成城大学助教授　野口武徳氏

〈ゲスト〉
同志社大学教授　オーテス・ケーリ氏

〈参加学生〉
一二〇名（うち女子五五名）
早大（一〇）、津田塾大（一〇）、東女大（一〇）、中大（九）、慶大（九）、日女大（七）、法大（七）、武蔵大（六）、一橋大（四）、東大（四）、東教大（三）、東京医科歯科大（三）、上智大（三）、埼玉大（二）、東工大（二）、お茶の水女子大（二）、東外大（二）、明学大（二）、立正大（二）、立大（二）、東洋大（二）、東経大（二）、東京水産大、独協大、女子栄養大、成城大、拓殖大、理科大、麗沢大、青学大、ICU、白百合女子大、明星大、共立薬科大、実践女子大、国立音大、跡見学園短大、昭和女子短大、YWCA学院各一名（四〇大学）


「傍目七目」を話すケーリさん

企画者の期待違わず好評
学生の参加も多く

今回の企画は色川大吉東経大教授、祖父江孝男明大教授、芳賀徹東大助教授が担当された。とくに祖父江、芳賀両先生は第25、26回共同セミナー「日本人とは何か」を指導されたことがあり、またとない適任者としてご協力いただいたわけである。実際の運営には小堀先生が運営委員長としてセクション指導のかたわら全期間精力的にお世話くださった。

全体講義の和歌森先生は、「日本人論」には歴史的な視点を落としてはならないことを強調され（本紙概要掲載）、ゲストのケーリ先生は二五年にわたる日本滞在の経験から、参加学生に向かって、まずユーモアたっぷりにみなさんより日本選手は長いということを言われ、「日本語」を宿命的に負わされ、それによって性格づけられている日本人というものを、日本人以上に巧みな日本語をあやつって話された。

セクション演習は、指導教授にそれぞれの分野で活躍中の方々をお願いして、おもしろいアプローチで日本人を考えたが、応募状況から学生の反響をみると、Cセクションを希望する者が最も多く、Bセクションではテルアビブにおける同世代の若者の行動を応募理由にあげる者がかなりあった。また性の問題を扱った異色のFセクションは案外、参加者が少なく、学生の方がかえってちゅうちょしていたようなところがうかがわれた。

（4頁より）

ても一貫して天皇のポストがあり、その座に即かれる者を通して日本の（政治的）社会の安定が保たれている。こうした天皇の機能は、日本人の民族的な性格と関係がないだろうか。ここに日本の一般社会における派閥的な抗争関係のもつ、非常に陰湿な動きを想定せざるを得ない。古くは六～七世紀にかけての蘇我と中臣の争いがあげられる。微力な中臣派が皇族派・宮廷派の中大兄皇子と結びつくことによって大化の改新となったのであるが、中大兄皇子自身が天皇になるということでは周囲が承知しないので、両側から超越した軽皇子を立てるという具合に、天皇は政治的抗争の緊張関係の調整に一つの役割を担っていた。明治維新における岩倉具視は、小御所の会議においても、また征韓論の場合も、「天皇のご意志」ということで相手を説得する。

そして実は、似たような方式が村落の社会にもみられる。家長と同族の輩との緊密な属縁的社会が土地を媒介とした主従結合になり、鎌倉時代にはこれを親方、子方と呼ぶようになったことでもわかるように、単なる領主対領民ではなく、社会の基本が親子関係でとらえられている。そして親方同士が互いに勢力を争うことになると、他の地域から権威ある武士、血筋のよい名だたる武門の実力者に乗り出してもらって解決すると

いうことが行なわれた。

このように抗争に調整を与えようとするところからくるものと、権威ある神秘的な性格のものをいただいてきて、自分の立場を強固にするというものとは基盤が通じている。言いかえれば、どちらにも主体性がない。このことは、日本人の外国文化に対する反応にもあらわれてきている。反応の仕方には、順応、それよりある程度の選択が伴う適応、対決的な姿勢である対応とがあるが、われわれ日本人には、この対応がない。ヨーロッパなどの場合は、征服に伴って高度の文化を植えつけていくことが多く、反応する側はかなり身を控えてその良し悪しを判断することになるが、日本の場合は、古代における朝鮮人の渡来にしてもまたアメリカの占領下においても、外来文化の入り方は征服を伴わないため反応が無造作というか無邪気で、順応ないしは適応というところではないかと思う。日本人は模倣ばかりで創造しないということがよく言われるが、本来、文化は、他の土地に流れ模倣されることによって刺激となって創造が行なわれるので、その点は日本についても同じことである。ただ極東の島国から大陸へ送り出すチャンスが乏しかったという歴史的な状況もあって、どうしても受身になったのである。

（「第48回大学共同セミナー」全体講義の概要・文責編集者）

第49回　大学共同セミナー

主題　偶然を考える

期日　昭和47年7月21～23日

〈ゲスト〉
学習院大学教授　下村寅太郎氏

〈特別講義〉
津田塾大学教授　小野山卓爾氏

〈運営委員長〉
東京女子大学教授　根岸愛子氏

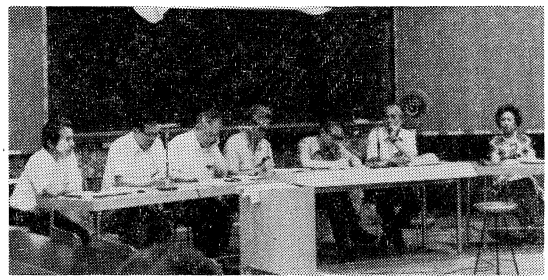
〈参加学生〉
五二名（うち女子二〇名）
早大（七）、東大（五）、東女大（五）、一橋大（四）、上智大（四）、津田塾大（三）、山形大（二）、信州大（二）、東外大（二）、日大（二）、日女大（二）、慶大（二）、千葉大、弘前大、ICU、理科大、共立薬科大、国学院大、中大、青学大、都立大、岐阜薬科大、立大、東経大短大部各一名（二四大学）

従来、主として哲学的立場で論じられてきた「偶然」を自然、社会科系の分野では、どう扱うのかという新しい試みであり、純粋理論から応用理論まで多彩な顔ぶれの先生が指導にあたられた。全体講義では、より理解を深めるために記録映画が上映され、また小野山教授による数学史の特別講義が組み入れられた。先生方によるシンポジウムおよび学生の報告を中心とした全体討議は、次のプログラムに時間が割り込むほど熱心に行なわれた。ゲストの下村教授の講演は、西欧と日本の言語の違いが、どのように異なった思考方法となってあらわれるかという興味深いものであった。

今回は根岸教授が運営委員長として全日程を泊り込み、シンポジウム、全体討議の進行を努められるなどご奮闘された。また二二日には、当ハウスの理事であり物理学界の先達である山内恭彦先生の古稀の集いが催され、きびしいスケジュールにうるおいを与えた。

〈全体講義〉
東京理科大学教授　増山元三郎氏

〈セクション演習〉
B　物理科学と偶然
——科学の共通感覚——
東京教育大学教授　戸田盛和氏
C　自然の認識における不確実性
——生物を対象とする実践の場からの考察——
東京大学講師　高橋晄正氏
D　社会科学における確率モデル
東京大学助教授　竹内　啓氏
E　歴史のなかの偶然
慶応義塾大学教授　神山四郎氏

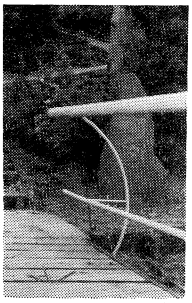

シンポジウム，左から小野山，戸田，高橋，増山，竹内，神山，根岸の各氏

◈かやばしに石の標識

昭和四五年五月一〇日の長期研修セミナー館のオープンハウスの折に、茅誠司先生に感謝して命名された「かやばし」の渡り初めをしたことは、本紙二一号にくわしく記されているが、やっと橋のたもとに記念碑をかねた石の標識が建った。根府川石に銅板をはめこんだ高さ一メートルばかりのしゃれた平石が、飛石を配した周辺の風景の中に、さりげなく重みを添えて立っている姿は、茅先生の風格にもふさわしいようだ。

字は書くことをあまりおすきでない茅先生の書かれたもので、すばらしい出来だという誰れ彼れの評をきくことは、この名所の存在を意味づけるものであろう。

なお、このあたりには東京大学小石川植物園から分与された宮城野の萩が植えられてあるので、秋の散策にどうしても足を留めたい橋のたもとである。


かやばしの記念碑

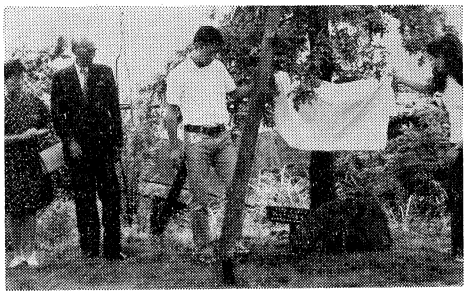
◈絶学無憂の碑

——山内恭彦先生古稀記念として——

七月二二日昼食後、この七月で古稀を迎えられた山内恭彦先生を迎え、共同セミナー参加の学生と教授たちとともに、同先生の古稀を祝い、七年に及ぶセミナー・ハウスに対する先生の奉仕に感謝するため、庭園の一隅に建てられた「絶学無憂の碑」を除幕した。

碑は小さな筑波石に先生の真筆の書がほられ、それにベンチをかねた大きな石をおき、傍らには、第二〇回共同セミナーのときに主題講演をされた先生に贈られたドイツ産の楓「ピンオーク」がみごとに大樹となって聳えている。

記念碑贈呈の野外集会を終って講堂に移り、同ご夫妻を囲んでしばらくお茶の会を催し、飯田専務理事、川原栄峰早大教授からの祝いの言葉、それから戸田盛和教授の進行で山内先生の話をきき、かつ学生の質問をうけてもらった。先生の博識、警抜な卓見、行くとして可ならざるはなしの同先生を知る、よい集いであった。


除幕式，左側山内博士ご夫妻

〈主題の主旨〉

確率抽出の行なえない社会現象あるいは経済現象に対して、確率論的な見方はどこまで有効なのだろうか。過去のデータしか利用できない場合なら、同じ疑問は生物現象でも起こる。偶然性を想定して解析したとすると、想定の根拠は何で保証するのか。これまでの測度論的確率論では可能な場合を全体として取り上げ、その一部を偶然にまかせてとることは実際家の責任とされていた。すると実際家が確率化できない社会現象、生物現象の中で歴史性の強い場合の解明には非力ということになりはしないか。最近誕生したばかりのアルゴリズム的確率論は、確率をでき上がった全体としてでなく、生成過程で見るという点で、実際家の責任を軽くする見込みがありそうだが、果たしてどうなるか。

第六回会員校事務連絡会

――初めて泊り込みの懇談を――

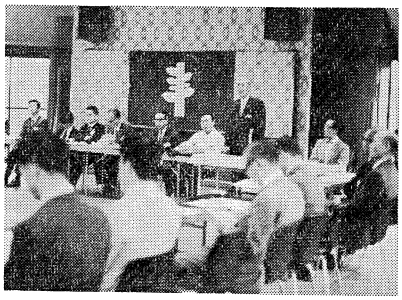
昭和47年6月27～28日

二六大学から四〇名の出席

日常業務を通じて当ハウスと最も関係が深く、かつ学生との接触も多い会員校の事務担当者の方々にこそ、当ハウスの宿泊施設の実際を知っていただくことが必要である。また当ハウスとはもちろんのこと、担当者相互の親睦を深めることも大事なので、今回、初めてプログラムに余裕をもたせた泊り込みの連絡会を開催した。

午後三時より講堂において二六校四〇名の出席を得て開会。長崎事務局長の司会のもとに、飯田専務理事のあいさつと全体報告、出席者と職員の自己紹介、関係各課の現況報告等が行なわれた。

六時からの懇親晩餐パーティは食堂において開催され、まず加藤理事長が歓迎と感謝のあいさつをされ、赤坂日大教授の乾杯をもって開宴し、なごやかな雰囲気が会場を満たし、懇親の実を挙げることができた。



会員校事務連絡会

二日目は主として会員校側の発言を中心にした懇談的討議を行ない、座長に赤坂三男日大教授、副座長に宮川清東大学生課長補佐を推し、次のような連絡事項、要望などが活発に話し合われ、午前一一時閉会した。

◇共同セミナーの会期は大学の試験期を考慮されたい。夏季休暇中に長期的セミナーの実施は考えられないか。

◇ポスターはできる限り開催日まで提示しておくようにしたい。

◇共同セミナーにおける単位認定は不可能か。

◇施設利用の場合、大学側の補助の状況はどうか。

◇レクリエーション施設の充実。

◇浴場の増設と内部設備の充実。

◇宿舎群に備付けの履物を。

（このご意見については早速購入し七月一三日に備え付けました）

◇全体的にみてPR不足の感がするが、出張PR等の方策はどうか。

◇便覧、学生手帳等への掲載用の一括した紹介文を送付してもらえれば、各大学の統一がとれる。

◇事務連絡会は年二回程度に。

会員校事務担当者名簿

大学名	職名	氏名	所属
青山学院大学	学生部長	高窪　貞人	学生部学生課
大妻女子大学	学生部長	望月左武郎	同　同
お茶の水女子大学	学生課外係長	宮腰　泰憲	同　同
共立女子大学	学生部長	犬丸　秀雄	同　同
慶応義塾大学	庶務課長	小沢　恒二	文書部庶務課
国際基督教大学	学生部長補佐	青木　実	学生活動室
順天堂大学	学生課	上西　守夫	同　学生課
上智大学	学生生活課係長	赤崎　光勇	学生生活課
成蹊大学	庶務課長	保谷　秀雄	事務部庶務課
専修大学	学生生活課長	飯島金四郎	人事課
中央大学	学生課係長	天野　成光	学生部学生課
津田塾大学	学生課長	寺出　澄子	学生生活課
電気通信大学	学生部長	丸竹　正一	学生部学生課
東京大学	学生課長補佐	宮川　清	同　同
東洋大学	学生課長	杉野　宏	同　同
東京医科歯科大学	学生課課長補佐	田渕　定人	同　同
東京学芸大学	学生課長	北沢　俊男	同　同
東京外国語大学	教務係長	山本　唯雄	同　教務課
東京家政大学	学生課長	見藤　妙子	同　学生課
東京家政学院大学	学生課長	手塚　六郎	同　同
東京教育大学	補導課長	近藤　寛	同　補導課
東京経済大学	用度営繕課長	水津　嘉視	用度営繕課
東京工業大学	教務課長	川代　重富	教務部教務課
東京慈恵会医科大学	事務部長	下　雅夫	進学課程
東京女子大学	学生課長	鈴木　法子	学生課
東京都立大学	学生課主事	岡部　光男	同
東京農工大学	学生係長	浦沢　健治	学生部学生課
東京理科大学	理学部主事	池田　久昭	庶務課
日本大学	学務部長	赤坂　三男	学生部
日本女子大学	学務部長	辻　キヨ	学務部学事課
法政大学	厚生課	坂本　秀雄	学生部厚生課
武蔵大学	学生部長	大竹　健介	学生生活課
武蔵工業大学	学生課長	小嶋　辰雄	学生課
一橋大学	庶務課渉外係長	若林　浩	庶務部庶務課
明治大学	総務課	進　俊夫	総務課
明治学院大学	学生部長	福田　幸穂	学生部学生課
横浜国立大学	厚生課長	武井　覚広	同　同
立教大学	学生生活課	石井　秀夫	同学生生活課
早稲田大学	学生生活課	佐伯このえ	同　同

寄付金報告

昭和47年4～6月

ご支援を感謝して、拝受いたしました。

〔一般寄付者芳名〕

三、〇〇〇円　立正大学　松沢ゼミ　殿

二、〇〇〇円　成蹊大学　日比行一　殿

二、〇〇〇円　都立大学　辻　正三　殿

三、〇〇〇円　新生活運動協会　殿

〔指定寄付者芳名〕

〈植樹基金〉

二〇、〇〇〇円　日本航空電子工業株式会社　殿

二〇、〇〇〇円　市光工業株式会社　殿

五、〇〇〇円　立正女子大学短期大学部英語英文科　殿

六、五七四円　第47回大学共同セミナー　殿

一〇、〇〇〇円　第48回大学共同セミナー　殿

〈現物寄付〉

植樹九本　東京大学　図書館　殿

業務通信

昭和四七年度は快調なペースで進んでいる。四月の利用者は三、七二五人で昭和四二年についで二番目だが、五月、六月は今までの最高記録で四、六九三人と、三、〇四五人である。七月は四、七三三人で第三位の記録だが、各月とも去年を三〇〇から六〇〇人ほど上回っているのが注目される。

今年の好成績の原因は、例年に比べ新入生のオリエンテーションの多いことがあげられる。

では次に今年の利用者の特色をみてみよう。第一に東京理科大の新入生オリエンテーションが一五日間にわたって行なわれたことが特筆される。それから補助ベッドまで用意し、収容力をフルに使って二五〇名をこなした津田塾大のオリエンテーションも印象強い。常連のお茶の水女子大、東京医科歯科大のほかにICU、立正女子短大の二校が新しくオリエンテーションを開いた。

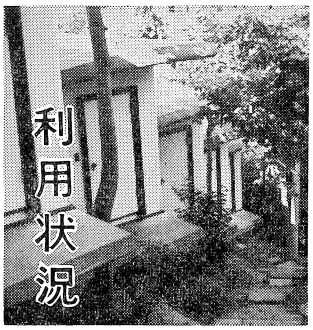
六月にはアリゾナ州立大学の日本研究の海外旅行団の先生や学生の皆さんが七月初めまで一五日間にわたって滞在された。七月の中旬には大学ではないが、番外利用者として東村山高校、月末には全国家庭クラブの高校生の諸君が若若しさをキャンパスいっぱいにくり広げてくれた。

今年の夏はきわめて暑い日が続き、八王子の丘もその例にもれないが、各セミナー室に冷房が入ったので、利用者も思わぬ施設の改善に喜んでいる。

寄贈図書

（昭和46年12月～47年7月）

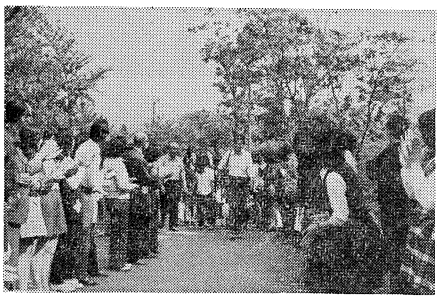
『手塚富雄全訳詩集』全三巻　手塚富雄殿
『記号論序説』　瀬在良男殿
『幹部のための損得学入門』　千住鎮雄殿
『技連誌』『GLC報告書』一一　法政大学学友会技術連盟殿
『私学に生きる』　高村象平殿
『はちおうじの教育統計』　八王子市教育委員会殿
『現代税法の構造』　北野弘久殿
『人間学』　A・マタイス殿
『哲学の歴史』　柏原啓一殿
『茶の間の経済学』　力石定一殿
『甘えの構造』　土居健郎殿
『キリスト教の源流』石原　謙殿
『人格と社会との出会い』　星野　命殿
『感染論』『病気とは何か』『生物と無生物の間』『パストゥール』『ウイルスの世界』　川喜田愛郎殿
『全釈良寛詩集』『良寛歌集』　飯泉　信殿
『国際経済と為替』『景気の変動』　春日井薫殿
『生産研究所紀要』第3号三　早稲田大学生産研究所殿
『日本国憲法概説』『岩波六法全書』　猪股寿和殿
『社会学論叢』五三・五四　笠原正成殿
『老人問題概論』　八王子市教育委員会殿
『八王子市の文化財』『八王子のけもの』　八王子市教育委員会殿
『Energy』三二　エッソ石油会社広報部殿
『ヒューマニズムの危機』『未来学原論』『豊かに生きる権利』『電気通信総合研究所報告』『日本の国勢図会』　佐藤喜一郎殿
『感染論』『病気とは何か』『生物と
『教育と文化』七号　筑波常治殿
『心のプリズム』　木村　繁殿
『豊臣秀吉の居城』　桜井成廣殿
『徳川合理思想の系譜』　源　了圓殿
『甘えの構造』『人と人との間』　弘文堂殿
『大学の月日』　山下　肇殿
『教育的行動学』『現代社会教育事典』　平沢　薫殿
『自然の統計的認識』　高橋晄正殿
『世界の名著』二八　中央公論社殿
『工学院大学研究報告』二九・三〇　工学院大学図書館殿
『佃島の今昔』　佐原六郎殿
『20年のあゆみ』　全国高等学校家庭クラブ連盟殿



◇四　月

関東学生英語会連盟
慶応義塾大学ライチウス会
独協大学助教授　高橋　正男
白百合大学英語劇
慶応義塾大学助教授　西川　俊作
学習院大シェイクスピア劇研究会
法政大学教授　石川　淳志
東京経済大学教授　坂野　観司
立命館大学助教授　畑中　和夫
明治大学講師　沖田　哲也
東罐興業（新入社員教育訓練）
日本大学税務会計研究会　忠　佐市
市光工業（新入社員教育）
日本航空電子工業（新入社員教育）
川鉄商事（新入社員教育）
東京学芸大学教授　辰見　敏夫
日本印刷技術協会
三栄測器（新入社員教育）
立教大学ミッチェル館（女子学生リーダートレーニング）　平木　典子
東洋大学助教授　松野　安男
東京都立大学司法問題研究会
跡見学園女子大学新入生オリエンテーション
東京医科歯科大学新入生校外オリエンテーション
早稲田大学生産研究所講師　中根甚一郎
日本大学教授　桑原　晋
美咲ナショナル電器販売（研修）
独協大学講師　G・リンツビヒラー
東京都立大学教授　佐藤　隆夫
青山学院大学教授　鵜沢　昌和
法政大学教授　尾形　憲
中央大学教授　宮崎　犀一
上智大学英語研究会
東京教育大学東洋史学科新入生ガイダンス　酒井　忠夫
津田塾大学教授　高見　幸郎
明治学院大学助教授　増田　茂樹
東京経済大学教授　向井　武文
明治学院大学講師　鈴木　守
中央大学講師　矢部　浩祥
中央大学教授　高田　博
明治大学講師　河野　一英
一橋大学教授　小野山卓爾
国士舘大学助教授　亀山　潔
東京大学大学院教育学研究科
神奈川大学教授　森泉　章
日本交通（社内研修）
立正大学講師　緑川　敬
一橋大学教授　小泉　明
青山学院大学助教授　石川　信男
東邦大学教授　藤本　節夫
全国家庭文書伝道協会
青山学院大学教授　天利　長三
いのちのことば社（修養会）
上智大学助教授　小林　宏晨
日本女子大学教授　佐藤　進

上智大学カトリック学生の会新入生オリエンテーションキャンプ
青山学院大学経済経営ゼミナール委員会
聖心女子大学 Year Book
青山学院大学教授　栗山益太郎
東京大学教授　吉武　泰水
立川スプリング（IE教育）
東京理科大学教授　阿部　三郎
東京農工大学助教授　金子　六郎
東京女子大学Q・G・S
明星大学児童文化研究部
松下電器産業（英会話練習）
西片町教会（聖書研究会）
仙川教会（修養会）
中央大学通信教育部（春期合宿）
専修大学教授　津田　昇
法政大学助手　北原　裕久
東京工業大学教授　真壁　肇
青山学院大学教授　原　豊
慶応義塾大学教授　槇田　仁
立正大学教授　杉澤　新一
工学院大学E・S・S


新入生を迎える（白梅短大オリエンテーション）

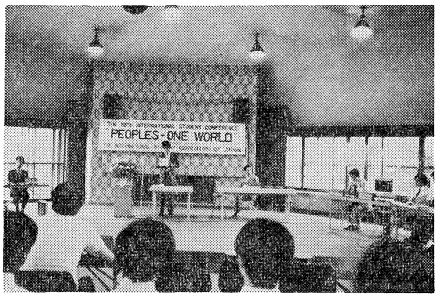
◇五　月
東京大学助教授　菅野　暁
東京工業大学助教授　坂田　勝
東京経済大学助教授　田中　章義
一橋大学教授　良知　力
東洋大学教授　御園生　等
電子技術総合研究所
東京経済大学教授　増田　四郎
日豪学生交換連盟　平松　幹夫
日本学生工業経営学会　村松林太郎
中央大学通信教育部法学ゼミ　小野田昌彦
立教大学教授　神島　二郎
武蔵工業大学教授　広瀬　鎌二
明治学院大学教授　森井　真
日本W・F・A　林　貞子
城西大学講師　原田　行男
立正大学教授　武田　良三
明治大学民族文化研究会　野間　繁
東京学芸大学社会科教育学科新入生ガイダンス
東京学芸大学言語障害児教育学科新入生オリエンテーション
立教大学教授　所　一彦
東京理科大学機械工学科新入生特別ガイダンス
都立立川短期大学教授　大竹　誠
日本特殊鋼（係長研修）
東京学芸大学理科学科新入生歓迎ゼミ
都立商科短期大学新入生歓迎交歓会　土肥　裕
津田塾大学フレッシュマン・キャンプ
立教大学教授　武沢　信一
東京都立大学教授　小畠　守生
東京学芸大学音楽教育学科新入生オリエンテーション
都立商科短期大学教授　宮本　敏雄
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
慶応義塾大学教授　生田　正輝
法政大学教授　岡本　秀昭
東京都立大学教授　三井　為友
東京理科大学建築学科新入生オリエンテーション
早稲田大学民主法律研究会
法政大学教授　山口　重克
立教大学教授　牛窪　浩
東京理科大学物理学科新入生特別ガイダンス
慶応義塾大学講師　師岡　孝次
東京理科大学数学科新入生オリエンテーション
白梅学園短期大学新入生オリエンテーション
東京家政学院大学教授　永沢　幸七
明治大学教授　内田　章五
駒沢大学助教授　中原　章吉
国際商科大学英語同好会
明治学院大学仏文学会
文京女子短期大学教授　栗田　見瑞
立正女子大学短期大学助教授　山本　裕実
日本国際学生協会
東京都立大学教授　金関　寿夫
第47回大学共同セミナー
東京工業大学教授　松田　武彦
国際基督教大学新入生オリエンテーション
東京理科大学教授　小原　清成
東京農工大学教授　高島　藤順
東京都立大学教授　辻　正三
東京都立大学法学部（新入生歓迎ゼミ）
◇六　月
慶応義塾大学教授　池井　優
東京理科大学応用化学科新入生オリエンテーション　目黒謙次郎
津田塾大学フレッシュマン・キャンプ

千人会

本年は金銭に余裕ができました。Aで送金します。来年はどうなりますか。

若い大学卒業生
古本　捷治
（三和プレシーザー勤務）

富士火災海上保険（新入社員研修）
東京学芸大学聴覚障害児教育教室（新入生ゼミ）　荒川　勇
立教大学教授　三戸　公
東京農工大学農芸化学科新入生オリエンテーション　川村　亮
青山学院大学助教授　二宮　理憙
中央大学教授　村田喜代治
東京理科大学物理学科新入生オリエンテーション　高橋安太郎
東京理科大学化学科新入生オリエンテーション　今村　喜夫
東洋大学心理検査研究会　山崎　啓
東京理科大学数学科新入生オリエンテーション　安達　忠次
日経連職務分析センター（職務分析員養成コース）
東京理科大学応用数学科新入生オリエンテーション　林　健児
美咲ナショナル電器販売
東京理科大学応用物理学科新入生オリエンテーション　巻田　泰治
国士館大学建築設備研究会　綾井九州彦
日本女子大学放送研究会
中央大学教授　那須　宗一
日本国際学生協会
東京女子大学教授　北村　常夫
玉川大学助教授　赤刎　引也
上智大第二回船上大学プレ・ゼミ
東京学芸大学数学科新入生ゼミ　松原　元一
東京学芸大学助教授　飯田　秀一
早稲田大学生産研究所　吉谷　竜一
デザインサーヴェイ連絡協議会　吉阪　隆正
大妻女子大学英文学科 The Apple
日本女子大学附属高等学校
大妻女子大学S・E・S　美ノ谷和成
立正大学講師
青山学院大学教授　守永　誠治
上智大学物理教室
東京経済大学教授　島袋　嘉昌
東京都立大学教授　山形　武虎
東京都立大学助教授　関口　晃
法政大学教授　今井　則義
東京学芸大学有志（卒論準備）
京王ストア（管理者研修）
新生活運動協会（新任担当者研修）
アリゾナ州立大学（日本文化研究）



高松宮殿下をお迎えして（国際学生会議開会式）

学習院大学教授　大川　章哉
東京理科大学経営工学科新入生オリエンテーション
第48回大学共同セミナー
東京大学物性研究所
全国耳鼻咽喉科医局員連絡会
東京大学教授　吉武　泰水
東京理科大学助教授　関根　達也
独協大学講師　富田　忠義
東京経済大学教授　荒川　幾男
明治学院大学教授　神保　信一
慶応義塾大学教授　村井　実
明星大学教授　加藤　長雄

◇七　月

一橋大学助教授　小和田　正
法政大学学友会技術連盟
都立商科短大教授　上原　孝吉
中央大学教授　宮崎　犀一
専修大学助教授　吉田　富義
明治学院大学教授　神保　信一
上智大学講師　V・ボネット
小西六写真工業
東京工業大学助教授　森田矢次郎
独協大学教授　林　俊一
上智大学英文学科夏季課外ゼミ　佐多　真徳
横浜国立大学教授　伊倉　退蔵
中央大学教授　小川浩八郎
明治学院大学教授　磯部　浩一
東洋大学教授　園田　義道
国際基督教大学心理学夏期セミナー　原　一雄
立正大学教養部教員研究会
東京都立大学教授　泉　三義
お茶の水女子大学新入生セミナー　太田　次郎
城西大学講師　原田　行男
白梅学園短期大学教養ゼミナール
世界連邦建設同盟夏季研修会
東洋大学講師　丸山　稔
東京都立大学講師　鴇田　忠彦
応用物理学会薄膜コロキアム
東京都立大学司法問題研究会
一橋大学助教授　山澤　逸平
中央大学助教授　伊藤　成彦
東京大学教授　竹内　昭夫
山梨英和短大英文科夏季セミナー
ツバメコート（社員研修）
東京都立大学都市計画研究室
明治学院大学教育問題研究会
東洋大学教授　藤木三千人
三菱鉛筆（監督者研修）
上智大学クリスチャン・ライフ・コミュニティーズ
都立立川短大教授　吉田　勉
東京都立大学教授　半谷　高久
東京都立大学助手　石井　昭夫
東京学芸大学助教授　谷　俊治
千住キリスト教会青年会
東京工業大学教授　酒井　善雄
東京大学教養学部総合コース
立教大学講師　有賀　弘
都立立川短大講師　能勢　征子
東京大学物性研究所研究会
電子技術総合研究所研究会
大塚学院書道部　山川美津子
学習院大学英文学科P・S・S
日軽アルミ（管理者研修）
国立教会（聖歌隊練習）
明治学院東村山高等学校
上智大学ロシア語劇サークル
東京都立大学助教授　門村　浩
お茶の水女子大学点訳グループ
東京都立大学助教授　針生　誠吉
明治学院大学講師　畠山　龍郎
上智大学教授　中山秀太郎
東京学芸大学教授　宇井　芳雄
昭和大薬品分析教室　辻　章夫
京浜女子大学講師　神保　信一
東京都立大学助教授　田辺　良美
東京家政大学講師　鈴木　敬司
一橋大学教授　亀井　孝
第49回大学共同セミナー
国学院大学助教授　小林　宏
東京大学教授　鈴木　圭介
日産丸紅商事
日本国際学生協会
武蔵工業大学教授　岡本　定次
日本大学講師　小田中敏男
京王帝都電鉄（社員研修）
東京都立大学教授　高木　鉦作
東京学芸大学助教授　森田　桐郎
日本女子大学日本文学研究会
中央大学緑法会
京王ストア郁粋会
都立商科短大商学科親睦会
全国高等学校家庭クラブ連盟

専務理事ノート

例年にない酷しい暑さがつづきますが、この夏最大のヒットは、七つのセミナー室には日立製作所の寄付で、教師館のサロンと特別宿泊室には松下電器産業の寄付で冷房装置がついたことです。夏のセミナー・ハウスはどうやらイメージ・チェンジができたようです。

それにしてもこの夏の特徴は公害裁判によって公害の社会的責任が明らかになったことです。これからの学問の任務は、GNPから公害、交通事故、荒廃する自然等の欠陥を差し引いて、人間が生きていくための生きがいの指標を確立することであろう。

不思議なことは企業の公害は大きな社会問題にするのに、この夏に人々は海に山に空かんと紙くずの山をつくることの責任を問おうとしないのです。尾瀬の自然を守ることの必要を叫ぶと同じように、不用不急の用事に車を乗り廻わして自動車公害の犯人となることの個々人の責任を問わなければなりません。

私は公害時代の到来を感じました。現東大総長加藤一郎教授の協力を仰いで、公害問題を中心として「産業と社会」という産業人セミナーを昭和四一年一一月に開催しました。加藤一郎教授はご専門の公害法の現状を展望して、公害の法律問題と企業の責任について講ぜられました。あのときは企業の無過失責任ということをきいて少しく驚きましたが、それがもう今日的用語となりました。おそらくあのときの参加者は、現在公害企業の中で良心的存在となっておられることであろう。あのときの指導教授たちと参加者がこの時点でもう一度この丘に集まられたら、さぞ急激な時代の変化に驚くことであろう。あれは公害セミナーの先取りでした。

このニュースの編集を担当していた娘がこの九月から英国のウッドブルク大学に留学しますので、本号をもって彼女の任務は終わります。セミナー・ハウスの建設事務を、半ば家内工業的に開始したのが昭和三五年であったが、それは彼女が高校一年のときでした。開館七周年を迎えた今年で、足かけ一三年になるわけです。彼女とのつき合いが意外に長いことに今さら驚いています。

こうしたニュース的機関紙は、ややもすれば形式的な公報になりがちですが、それでは読者と編集者との間に共鳴は生じません。このニュースの記事はどんな小さなものでも、美しい人間の行動によって裏うちされています。私はいつも尊敬すべき奉仕と貴重な善意がセミナー・ハウスの礎であることを確かめながら、血の通ったニュース・レターとして編集したいのです。